５．中世の岩戸

中三川　昇

岩戸満願寺の中世における地理的環境

平安時代末頃の三浦為通や為継に始まると伝わる三浦一族は、宝治元年（1247）の宝治合戦で宗家が滅亡するまで、衣笠地域や大矢部地域を核として久里浜から衣笠に至る地域に連なる「古久里浜湾西岸遺跡群」［中三川 2015］一帯を本貫地・拠点としていたと考えられ、当地に数多くの遺跡や寺院、仏像などを残している（第 55 図）。この時期の地理的環境としては、東京湾に面した久里浜付近から北西方向に古久里浜湾（古平作湾とも）の入江が奥深くまで存在していたと想定され、陸路で衣笠・大矢部地域から東京湾への出口となる久里浜地域へと繋ぐ経路はこれらの遺跡群を貫く地溝帯状地形部分にあったと考えられる（図中黒破線）。岩戸満願寺はこの経路のほぼ中ほどに位置しており、「岩戸」の名の如く三浦氏本貫地の中核地帯に入る関門ともいえる場所に築かれていることになろう。

満願寺遺跡の調査地点と近隣遺跡の調査概要

満願寺遺跡は岩戸満願寺の現境内地とその関連遺構や遺物などを包蔵していると考えられる範囲である。遺跡の標高は 20 ～ 22 m前後で、わずかに南側に向かって傾斜した地形である。遺跡の北側は丘陵斜面で画され、南側はほぼ旧道に画された範囲で、より南側部分は地形的に一段低くなっている。遺跡範囲は北西から南東方向に約 170 m、北東から南西方向に約 56 mほどである（第 56 図）。満願寺遺跡内では記述の試掘・確認調査以外に現在まで発掘調査は行われていないが、図中に示した地点を含め複数か所で工事立会を行っているが、残念ながらいずれの地点でも遺構・遺物は確認されていない。

満願寺遺跡に隣接する遺跡としては飯盛塚と満願寺東横穴群があり、平成９年（1997）２月に横須賀市自然・人文博物館による学術調査が行われている。正式な発掘調査報告はなされていないが、調査の概要は示されている［稲村 1998］。

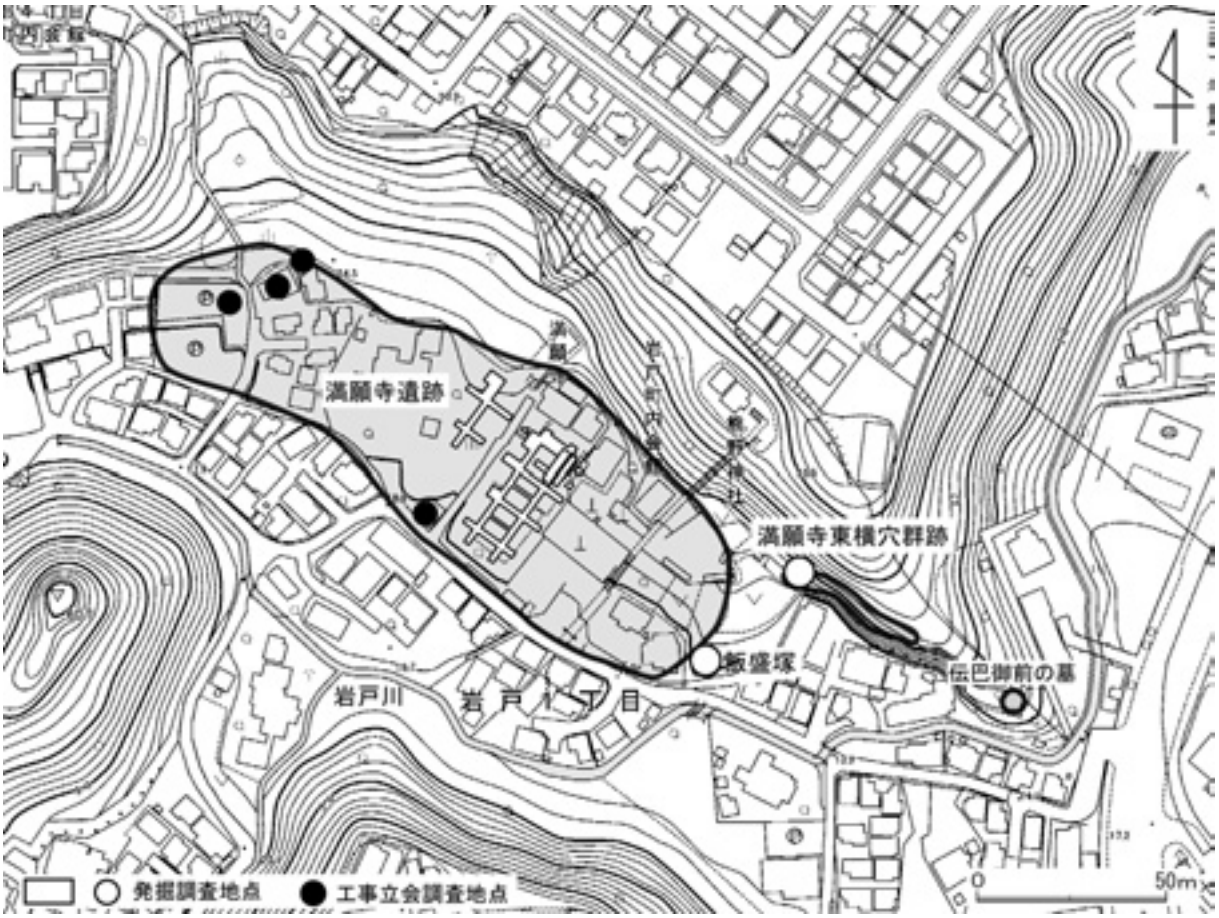
塚状地形の飯盛塚では古墳の可能性も考えたトレンチ調査を行っているが、中世とされる擂鉢片が 1 点出土したのみで、塚状地形も自然地形であることが確認されている。

満願寺東横穴群は岩戸満願寺の背後から続く丘陵斜面下部に立地し、横穴墓６穴の存在が確認されていたが、満願寺遺跡の東端から 20 m弱前後の位置にある第１号穴と第２号穴の横穴墓２か所が調査されている。いずれも基本的には古墳時代後期の横穴墓であるが、第２号穴内には五輪塔を中心とした石塔類が多数納められており、やぐらに転用されている可能性が考えられた。第１号穴では中世の遺構・遺物では五輪塔と宝篋印塔の部材を組み合わせた石塔１基が発見されたのみであったが、第２号穴では覆土中から、鎌倉時代前半期と考えられる手づくねかわらけ（第 58 図１）や南伊勢型鍋片（第 58 図２）、15 世紀前後と考えられるロクロ成形のかわらけ（第 58 図３・４）、古瀬戸の卸皿（第 58 図５）などが出土している。これらの遺物がすべてやぐらとして再利用された結果残されたものか否かは検討を要するが、満願寺遺跡のこれまでの発掘調査では、社伝や出土瓦などから鎌倉時代初期と考えられる岩戸満願寺創建期のかわらけや土器類は確認されておらず、手づくねかわらけや南伊勢型鍋の存在は重要である。これらは満願寺遺跡の発掘調査が進展した場合、既調査区の下層部分や未調査地域に鎌倉時代初期の遺物が包蔵されている可能性を示唆する出土遺物と言えよう。今後、満願寺遺跡の調査が進展し、その実態が解明されて行くことを期待したい。

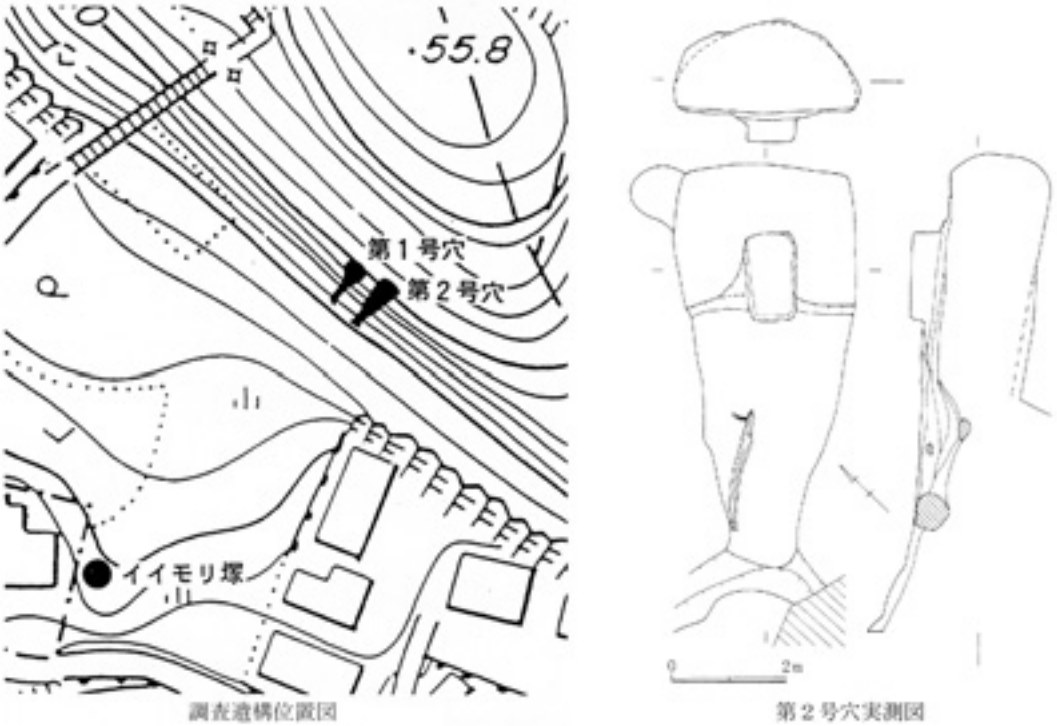
【参考文献】

稲村 繁 1998「イイモリ塚・満願寺東横穴群」『横須賀市埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅵ』横須賀市教育委員会

第 55 図　中世前期の想定地形と中世遺跡と寺社の分布図



第 56 図　満願寺遺跡と周辺遺跡の調査地点（1/1000）



第 57 図　満願寺東横穴群・飯盛塚の調査遺構位置図と第 2 号穴実測図（稲村 1998 を一部改変）

第 58 図　満願寺東横穴群第 2 号穴出土の中世土器・陶器（横須賀市自然・人文博物館蔵）